

自動化書庫の導入と運用について —国際基督教大学図書館の運用事例報告—

Introduction and management to Automated Storage and Retrieval System : In case of International Christian University Library

黒澤 公人*

抄 録

本学図書館では、2000年9月より、50万冊収容能力をもつ自動化書庫を運用してきました。本学図書館の自動化書庫システムと図書館システムは、連動しており、Web-Opacの図書検索から簡単に在庫指示を出すことができます。

また、日々増加し、開架書架に入りきらなくなった図書を書架から抜き出して自動化書庫に入庫するだけで、図書館システムにそのままデータが反映し、すぐに自動化書庫から取出し可能状態になるなど、作業の簡便化が計られています。現在、自動化書庫には約20万冊の図書が入庫されており、自動化書庫の導入の経緯、運用実績について報告します。

目 次

はじめに

- 1 自動化書庫を持つ図書館の建設コストと書庫空間。
- 2 自動化書庫の建設とスケジュール。
- 3 自動化書庫への17万冊の初期入庫作業。
- 4 自動化書庫システムの図書の入庫、出庫管理。
- 5 自動化書庫システムの図書の所在管理。
- 6 出納ステーションの配置と要員。
- 7 自動化書庫と一般書架の共存。
- 8 本学図書館の運営スタイル。
- 9 今後の動向。

最後に

○ はじめに ○

本学図書館は、1960年に、それまで大学本館の中にあつた図書室から、15万冊収容できる独立した建物として現在の図書館が建設されました。この図書館の設計にあたり、利用者が図書を利用しやすいように、3層構造の中央を参考図書を集めたレファレンスフロアとし、一般図書を上下階に配置した全面開架制度を採用していました。そ

の後、1972年に増築され、30万冊を収納可能な図書館に拡張されました。(設計上は30万冊ですが、現在40万冊収納されています。)

1980年代後半には、蔵書が図書館の収容能力を上回り、書架に収容できない図書を倉庫業者に委託しました。2000年に新図書館が建設されるまでの最終的な委託量は、全蔵書量の3分の1にあたる17万冊 ダンボール箱にして、7,000箱になりました。

新図書館は、50万冊収容可能な自動化書庫が設置され、倉庫業者に預けてあつた図書を引き取り、自動化書庫に収納して、2000年9月にスタートしました。現在は全蔵書60万冊となり、開架書架40万冊と自動化書庫20万冊で運用しています。

大学図書館のあり方に、全面開架制度という運営を掲げてきた本学図書館が、自動化書庫をどのように導入し、運用しているのかを報告します。

大学図書館員は何をしているのか University librarian, what are you doing ?

牛原 秀治*

抄 録

書誌ユーティリティの発達は、資料組織業務にコピーカタログという「非専門的業務」を生みだし、「専門職」としての図書館員の拠り所が危うくなっているということが、「大学図書館界」でごく普通に語られるのを耳にするたびに、果たして本当にそうなのかという疑問を感じてきた。労働における「熟練」という言葉にこだわって、資料組織業務を分析するなかから、大学図書館員の「専門性」が図書館以外の「一般的な文脈」の中で認知されうる可能性について考察する。

目 次

はじめに
大学図書館の業務分析
「学術情報センター」から始まる
大学図書館において資料組織業務はどの
ような位置にあるのか
大学図書館員は専門家か
おわりに

ろうかということについて、理解を深めていく努力がなされていないのではないかと反省から、図書館業務を、一般社会における労働の種々な分析と同様の観点から考察することを通して、図書館が現在直面している様々な困難のベースにあると思われるこうした認識の改変の可能性を探ることを目的としている。

○ はじめに ○

図書館の業務について書かれたものを読むたびに思うことは、それが一般的な文脈から離れて、ほとんど隔離されたといってもいい状況の中で、すなわち「図書館的文脈」の中でのみ考察されているのではないかとということである。

このことは図書館業務の専門性という、長い間議論されながら一向に解決しない問題とも関連していて、いわゆる「業界」の中では一定の共通認識があるように錯覚されていても、一度外側から見ると、そうした認識が何ら根拠あるものとして認知されていないことにも現れている。

この小論は、「専門職としての図書館員」という言葉の陰に隠れて、自分たちが日常的に行っている業務が、一般的事務労働と一体どこが違うのだ

○ 大学図書館の業務分析 ○

大学図書館員は、日頃いったいどんな仕事をしているのかということから始めなければならない。

業務分析については、全国国立大学図書館長会議（1968）^{<文献1>}以降、現在にいたるまで、組織的、総合的に、調査、刊行された大学図書館の業務分析は存在しないということで、小論においては、考察の手掛かりとして、日本図書館協会の諮問を受けてまとめられた、専門性の確立と強化を目指す研修事業検討ワーキンググループ（第2次）（2000）^{<文献9>}所載の「業務分析」をとりあげることにした。

「業務分析」は、大学図書館の業務を下記のような項目に分けて整理している。

*うしらは ひではる 神戸市外国語大学図書館 平成15年12月24日 受理

目 次

図書館員の「資格」考—公立図書館員の 新しい資格制度に関する議論の経過、そして大学図書館員 About "the qualification" of librarian: Progress of the argument on a public librarian's new qualification system, and academic librarian

鈴木正紀*

抄 録

この国の「司書」資格は、本来公立図書館の専門的職員の能力を証明する資格でありながら、実態として他の館種においても、基礎的専門能力を証明する資格として作用しているという、形式的、実態的特徴について考察した後、日本図書館協会における公立図書館員の司書資格の上位に位置する「上級司書」資格に関する議論の経過と、その特徴について述べた。その上で、大学図書館及び職員にかかわる最近の動きを概観し、専門職制度については、そのよって立つ社会的・文化的基盤に基づいた制度設計が必要であることを述べた。

目 次

1. はじめに
2. 図書館員と「司書」資格
3. 日本図書館協会の取り組み
 - 3.1 研修問題特別検討委員会
 - 3.2 研修WG
 - 3.3 研修委員会
 - 3.4 専門職認定制度特別検討チーム
 - 3.5 新制度の特徴
4. おわりに

この小稿では、その「司書」資格について若干の考察を行った後、日本図書館協会で検討されてきている公立図書館の「上級司書」制度について、これまでの検討経過及びその特徴を紹介する。そして最後に、大学・大学図書館のおかれた環境が大きく変化する中で、大学図書館員をめぐる状況・展望について私見を述べる。

○ 2. 図書館員と「司書」資格 ○

○ 1. はじめに ○

現在、日本図書館協会では公立図書館職員の専門的能力を評価する新たな資格制度の検討を行っている。筆者はたまたま最初の段階から検討の場に参加することとなり、現在に至っている。

資格とはもとよりその職務を遂行する能力を証明するものである。図書館においては司書資格がその主要なものとして認識され、現在に至っている。しかしその司書資格をめぐるさまざまな問題点が指摘されているのも事実である。

この国の図書館職員に関する法的資格としては、司書、司書補、司書教諭が存在する。

このうち前2者は図書館法によって定められている、公立図書館の専門的職員のことを指している。そして、司書教諭は教諭をもって充てる学校図書館の専門的職務を司る職種であるとされる。

これらのうち司書資格は、現実には、他の館種の専門的職員として働きたいものにとっても、その専門的能力を「証明」する資格として準用されているのが実態である。たとえば、私立大学で図

*すずき まさのり 文教大学越谷図書館 2003年12月12日 受理

L-Learning・オンライン模擬試験の 実施経過と次期フェーズ

Progressive Report of L-Learning Trial Examination and Its Next Phase for the Project.

池田剛透*

抄 録

本稿は平成15年度JLA全国図書館大会第10分科会にて発表した「L-Learning・オンライン模擬試験の趣旨と成果」の報告をもとに加筆・修正したものである。

このプロジェクトは大学図書館員を対象としたメーリングリスト(以下MLと略)の有志によって、大学図書館司書の自己点検、自己評価方法の一つの試みとして始められた。

学習の手法としてはe-Learning(WBT=Web-Based Training)を利用したオンライン教育であり、利用者はいつでも自由に模擬試験を受けることができる。試験を受けた多くの方々の意見や感想、プロジェクトメンバーの試行錯誤から提案されたアイディア等を元に、プロジェクトの次期フェーズが見えてきている。それらの中から実際に行動に移したもののや、これから検討したい内容も含めて今後の展望を述べてみたい。

目 次

- 1 はじめに
 - 2 L-Learning・オンライン模擬試験の実施経緯
 - 3 L-Learning・オンライン模擬試験とは
 - 4 問題作成に関するノウハウ
 - 5 ホームページの仕様と模擬試験の流れ
 - 6 模擬試験の途中経過による分析
 - 7 模擬試験への意見、感想(一部紹介)
 - 8 模擬試験の問題点と対策について
 - 9 L-Learningの次期フェーズ
 - 10 おわりに
- 質疑応答

○ 1. はじめに ○

本稿は平成15年度JLA全国図書館大会第10分科会にて発表した「L-Learning・オンライン模擬試験の趣旨と成果」の報告をもとに加筆・修正したものである。

このプロジェクトは大学図書館員を対象とした

メーリングリスト(以下MLと略)の有志によって、大学図書館司書の自己点検、自己評価方法の一つの試みとして始められた。学習の手法としてはe-Learning(WBT=Web-Based Training)を利用したオンライン教育であり、利用者はいつでも自由に模擬試験を受けることができる。現在、模擬試験のページでは、1期メンバーによる50問の出題に加え、2期メンバーの50問と併せて、100問の問題が掲載されている。

試験を受けた多くの方々の意見や感想、プロジェクトメンバーの試行錯誤から提案されたアイディア等を元に、プロジェクトの次期フェーズが見えてきている。それらの中から実際に行動に移したもののや、これから検討したい内容も含めて今後の展望を述べてみたい。

*いけだ よしゆき 多摩大学メディア&インフォメーション・センター L-Learning実行委員会 委員長 2003年12月6日 受理

「六本木ヒルズに学ぶ図書館戦略」（小林麻実氏）講演報告 "Library strategy studied to Academyhills Roppongi Library" (Director Mami Kobayashi) lecture report

豊田 裕 昭*

抄 録

2003年4月25日、六本木ヒルズ内の森タワー49階、50階に会員制で有料の図書館がオープンし、話題となっているアカデミーヒルズ六本木ライブラリー、その紹介とその図書館戦略の講演がされました。(2003年11月5日)

今までとは違う図書館、人と本をつながのみならず、人と人との出会い、新しく出会うチャンスもライブラリアンの役割としてコーディネートするという。また偶然の出会いを重視し、自分が思っても見ないようなもの、意外なものに出会って欲しい。自分の趣味や興味の範囲外のものに出会うことによって、イノベーションが生まれる。そのような場所になってほしいというライブラリーディレクターの小林麻実氏の講演及びセミナーの内容をまとめました。

目 次

- 1 はじめに
- 2 六本木アカデミーヒルズとは
- 3 ライブラリー構想
- 4 ライブラリー経営
- 5 六本木ライブラリーについて
- 6 まとめ
- 7 おわりに

附録

ことですが、普通に考えると図書館は無料という認識から、一般的には非難されやすいというが、余り好意的には図書館界には受け取られてはいないということは、充分承知の上で、無料という原則にとらわれることなく、また会員制として人と本をつながのみならず、人と人との出会い、新しく出会うチャンスもシステム化することも範疇にする。

そして、そもそも図書館は何なのか、何のために存在しているのか。この視点から今までとは違う役割を与えようという小林さんの目指すライブラリー像が、六本木ライブラリーの紹介と共に講演されました。

本稿は、当日の小林さんの講演及びその後の見学セミナーでの説明内容を基に構成し執筆をさせて頂きました。

○ 1 はじめに ○

「会員制で有料です。」
「何処にどんな本があるのかわからない。」
「本は貸出ししません。売っちゃいます。」

そんな出だしで始まったフォーラム「六本木ヒルズに学ぶ図書館戦略」、講師は外資系の企業資料室から招かれた、アカデミーヒルズ六本木ライブラリーのディレクターの小林麻実さん。

六本木という派手な場所に森ビルというバブルなイメージの会社が、会員制で有料でライブラリーをやるということで、取材なども結構多いとの

○ 2 六本木アカデミーヒルズとは ○

六本木ヒルズ森タワーは、御存知のように森ビ

*とよだ ひろあき 一橋大学附属図書館 2003年11月29日 受理

第34回 大学図書館問題研究会 全国大会
奈良大会 記念講演「ようこそ万葉の世界へ」記録集
To the Nara convention commemoration lecture
record collection "Just a way is to the world of
Manyoushu"

講演者 上野 誠*
司会 土井 貴美子*

抄 録

去る2003年8月23日（土）奈良県文化会館で行われた、全国大会記念講演、上野誠先生の「ようこそ万葉の世界へ」の講演記録です。

万葉集は言葉の文化財である。万葉集という歌をを通じて、その時代というものが解る。歌は言葉によって、その時代の肌触りのようなものに接することが出来るという。そのためには、歌を立体的に見ることで如何に身近に感ずることが出来るのか。これが万葉集を、古典を解ることになるという。

（司会）

本日の記念講演のほうを始めさせていただきます。司会をさせていただきます奈良支部の土井と申します。よろしくお願いいたします。

まず、本日の講師です上野先生の紹介をさせていただきます。

上野誠先生は1960年福岡県生まれ、国学院大学大学院文化研究科博士課程を修了され、現在、奈良大学文学部国文学科助教授であると同時に財団法人奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所副所長をはじめとして数多くの学会等でもご活躍されておられます。

御専門は歴史学や考古学、民俗学を取り入れた万葉研究で、第12回日本民俗学会奨励賞や第15回上代文学会賞を受賞されておられます。

著書といたしましては「古代日本の文芸空間：万葉挽歌と葬送儀礼」や「風呂で読む万葉挽歌」など多数ございます。また「万葉うた紀行：古代の都」というCDをリリースされておられますほか、

「上野誠の万葉歌ごよみ」や「ないと・えっせい」などのラジオ番組でもご活躍でございます。本日は「ようこそ万葉の世界へ」というテーマでご講演をいただきます。それでは先生、よろしくお願いいたします。

（拍手）

上野でございます。あの私、今日来る時に、近鉄奈良駅の近くの喫茶店におりましたら、皆様方が持っておられる封筒と全く同じ封筒を持っていたらっしゃる方が隣に座ってまして、おもしろかったですね。「4時からの講演、聞かつもり？」、「いやあ、もう聞かずにどっかへ行くつもりや。」とおっしゃった。「なあ、そんな万葉の話し聞いても、暑い時になあ〜」とこう言われましたので、私もこのところで「わしが、あああ・・・」と言おうと思ったのですが、やはり角が立つと思い

*うえの まこと 奈良大学文学部助教授 2003年12月14日 受理

*どい きみこ 奈良女子大学附属図書館